

学位論文要旨

レヴィナス〈他者〉論の教育学的意義に関する研究
—他者論の言語的諸特性を中心に—

申請者

安 喰 勇 平

I. 論文題目

レヴィナス〈他者〉論の教育学的意義に関する研究
—他者論の言語的諸特性を中心に—

II. 論文構成

序章 教育学における他者論の展開とそこでのレヴィナス〈他者〉論の位置

第1節 教育学における他者論の展開と残された課題

第1項 教育学における他者論の展開

第2項 教育学における他者論の残された課題

第2節 教育学におけるレヴィナス受容概観

第1項 日本における教育学のレヴィナス受容

第2項 英米圏における教育学のレヴィナス受容

第3項 レヴィナスの多様な解釈を支えるもの

第1章 レヴィナス〈他者〉論の基本モチーフ

第1節 レヴィナス〈他者〉論の基本モチーフ：

主体と〈他者〉との倫理的関係性に関する論述を中心に

第1項 哲学史上におけるレヴィナスの位置

第2項 享受

第3項 労働と所有

第4項 「顔」の到来

第2節 レヴィナス〈他者〉論に対する諸批判

第1項 ジャニコーによるレヴィナス批判：神学的転回

第2項 デリダによるレヴィナス批判の論考「暴力と形而上学」

第3項 レヴィナスのフッサール解釈とその誤り

第4項 レヴィナスのハイデガー解釈とその批判

第5項 レヴィナスとデリダの暴力論

第3節 レヴィナス〈他者〉論の「転回」

第1項 絶対的〈他者〉表現の方法の探究

第2項 語ること／語られたことの対概念

第3項 〈他者〉論に付き纏う懐疑論的な思考

第2章 レヴィナス言語論の自己言及的特性：レヴィナス〈他者〉論解釈論争概観

第1節 レヴィナス言語論の射程

第1項 レヴィナス言語論に着目する理由

第2項 ビースタの立論の再構成

第3項 「語ること」をめぐる概念群の自己言及性

第4項 痕跡としての「語られたこと」

第2節 捨象された言語論

第1項 言語の本質：『全体性と無限』の二つの序文から

第2項 存在論的言語の再解釈

第3節 レヴィナス〈他者〉論のプログラム

第3章 他者論の筋立てとしての叙事詩的な語りの問題：

変容の契機として他者を位置付けることへの批判的考察

第1節 「他者との出会いを通して自己同一性が問い直される」という筋立て

第2節 ジョルダスマによるレヴィナスの援用

第1項 教師の自律的主体モデルに対する批判

第2項 他者との出会いを介して課される責任

第3項 「記憶不可能な時間」における呼びかけ

第3節 レヴィナス主体性概念の時間性

第1項 ジョルダスマへの批判：レヴィナス援用の恣意性と一面性

第2項 叙事詩的な語り方で捨象される反時間性

第4節 反時間性に基づくレヴィナス主体性概念の筋立てとその批判の意味

第4章 レヴィナス隠喩論における意味の伝達：叙事詩的な語りを超えて

第1節 レヴィナス〈他者〉論における隠喩論の位置

第2節 隠喩における二つの意味作用：絶対的隠喩と相対的隠喩

第1項 「戯れの超越」批判

第2項 対話者の意味作用

第3節 対話者としての〈他者〉と自己との関係

第1項 関係の端緒としての対話者による自己の審問

第2項 対話者に対する表現

第3項 対話者への方向の廉直性

第5章 レヴィナス〈他者〉論の方法としての誇張法

第1節 「～し直す」という成長モデルの意義と課題

第2節 認識能力の限界を認識すること

第1項 反省と説明の原理的困難

第2項 レヴィナスの受動的主体形成論

第3項 バトラーの狙い：ナルシズムの回避と新たな倫理の提示

第3節 レヴィナスの方法としての誇張法

第1項 誇張法と超越論的方法

第2項 誇張法に備わる批判的反省的機能

第4節 教育学における他者論の〈意味〉

終章 レヴィナス〈他者〉論の教育学的意義

第1節 教育学とレヴィナス〈他者〉論の関係可能性

第2節 ナルシズムとエゴイズムへの絶えざる警戒

参考引用文献

Ⅲ. 本研究の問題設定（序章）

1. 問題の所在——教育学における他者論の方法の問い

他者を主題に据えた教育学の研究は2000年以降多く見られるようになってきた。この潮流は、人文・社会科学においてポストモダニズムやポストコロニアリズムなど、他者を主題に据えた研究が広く展開するなかで、教育学においても生起するようになった。その教育学における他者論は、大きく二つの種類に分類することができる。教える者にとっての学習者を他者と捉える研究と、学習者にとっての教える者あるいは世界を他者と捉える研究である。前者では、教育的関係に立ち現れる他者が、完全にはコントロールしえない、予測を超えた反応をしうる「潜在的な他者」として説明される。そして、「学習者の潜在的な他者性と出会う余地」を残しながら学習者とかかわる、という教える者の備えるべき倫理的態度が論じられた（丸山 2002）。後者では、学習者にとっての教える者の卓越した性質や、学習者にとっての世界の慣れ親しみのない性質が見出された上で、学習者と他者との出会いを通じた学びのあり様が論じられた（高橋勝 2007；矢野 2008）。教育学における他者論は、認識能力の限界の指摘や、合理主義的・科学的な知の体系の批判を通して、教育の倫理や学びの新たなあり様を提示してきたのである。さらに近年では、これら教育学における他者論の提示してきた成果を下敷きにした研究が、共生教育や教師教育、道德教育、物語論の分野などで多様に展開してきている（高橋舞 2009；野平 2010；古屋 2014；丸山 2012；丸山 2014；森岡 2005；矢野 2010）。

ただし、これら教育学における他者論には、ある問題が付きまとうことに注意したい。それは、論じる方法の問題である。他者論は、それまで社会的・歴史的に疎外されてきた者や領域へと光を当てることによって、それら疎外されてきた者や領域を視野に入れることを、また、その疎外を成立せしめていた枠組みの開示を可能にする。このように、これまで表象されてこなかったものを新たに表象する試みとして他者論を特徴づける時、他者論の語り方が問題になる。例えば、「教える者の認識では捉えきれないものを、自身の認識枠組みを超えて、認識し続けることが倫理的に必要である」と論理的に主張する際には、より強靱な認識の力を前提とした語り方が採られる（齋藤直子 2002）。また、「理論化できない非知の体験が子どもの成長に資する」と論じる際には、理論として説明しきれない性質を強調しつつも、理論化不可能なものの理論化可能性を前提とした語り方が採られる（矢野 1999；矢野 2008）。これらの例が示すのは、他者論で批判する対象を前提とした上で他者論を展開してしまうという、他者論の自己矛盾の事態である。この自己矛盾の事態は、教育学における他者論が批判しようとしていた枠組みが、より強靱なものに組み替わることを帰結しかねないという点に注意が必要だろう。

他者論では、他者とは何かという内容の問いと、それをどのように論じうるかという方法の問いが同時に問題になる。そして、この方法の問いは、語りえないこと・知りえないものにかかわる内容を、いかに読者に伝達しうるか、と言い換えられよう。そして、教育学における他者論の方法の問いでは、とりわけ読者の教育的まなざしを転換させる契機をいかにもたらしうるか、が問われる（齋藤直子 2002；皇 2012；丸山 2002）。しかし、この教育学における他者論の方法の問いは、主題的に論じられることが近年少なくなっており、十分に組み込まれず手つかずのままだと言える。以上の現状を踏まえ、本研究は、教育学における他者論を内容面からだけでなく方法面からも考察することによって、自己矛盾の事態のもたらす問題を乗り越える視点を提起することを目的とする。

2. 本研究の対象——なぜレヴィナス〈他者〉論なのか

この他者論の方法の問いに取り組んだ哲学者としてエマニュエル・レヴィナス (Emmanuel Lévinas 1906-1995) が挙げられる。レヴィナスの〈他者〉論は、伝統的な西洋哲学で顧みられなかった(顧みられたとしても、レヴィナスからすれば、十分でなかったとされる)〈他者〉の尊重を主張し、認識作用や知覚作用によっては捉えられない〈他者〉の特権的な位置付けを示したことで知られる。また、そこでは、〈他者〉を尊重しつつかわる、倫理的な自己のあり方が描かれている、と言われる。自己と〈他者〉との関係の倫理について論じたレヴィナスは、それら内容面だけでなく、〈他者〉を論じるための方法を工夫したことで知られる。他者論の内容面と方法面の両面に関する諸工夫が施されながら編まれたレヴィナス〈他者〉論は、教育学における他者論の自己矛盾の事態を理解するのに、十分に妥当な参照項だと言える。しかしながら、彼の〈他者〉論の方法をめぐる議論は、未だ十分に整理されてきたとは言い難い。その理由は、レヴィナスが自身の論述方法に関する記述をあまり残していないという資料上の問題があったが、レヴィナス著作集の刊行によって、彼の〈他者〉論の方法に関する資料群も整ってきた。そこで本研究は、レヴィナス〈他者〉論を主たる研究対象として取り上げる。

IV. 論文の要約 (第1章～終章)

——第1章 レヴィナス〈他者〉論の基本モチーフ——

レヴィナス〈他者〉論の独自性は、あらゆる概念や認識作用、解釈から逃れるものとしての絶対的な〈他者〉を論じる点にある。そのような独自の〈他者〉論を構想することによる彼の狙いは、西洋哲学に通底する全体性の傾向を批判することにあつた (TI:6)。その全体性の傾向を、二つの方向性に大別できる (関根 2007:40)。一つは、他者を主体に従属させることで、他者と主体の隔たりを解消しようとするものである (認識論批判)。もう一つは、ある中間項を介することによって、他者と主体の隔たりを把握可能なものに還元するものである (存在論批判)。これら全体性とは異なる仕方で〈他者〉と関わる可能性を探求したのがレヴィナス〈他者〉論である。

上記の特徴を持つレヴィナス〈他者〉論は、しかしながら、その〈他者〉論の内容の変更——この変更は、「前期」から「後期」への変更と称される——を迫られるほどの決定的な批判を加えられた、としばしば指摘されてきた (熊野 2012; 佐藤 2000)。その決定的な批判として挙げられるのがデリダによるレヴィナス批判の論考「暴力と形而上学」である。デリダの批判の要点は、レヴィナス〈他者〉論が抱える方法上の自己矛盾である。デリダによれば、レヴィナスは、〈他者〉が存在論では捉えきれないものであることを主張しているにもかかわらず、あたかもそれが存在するかのごとく記述している、と言う。デリダが言うように、レヴィナスは、批判しようとしたものを前提しながら、〈他者〉、外在性、無限といった諸観念の重要性を説いている (Derrida 1998[1967]:165)。すなわち、レヴィナスの主張内容 (〈他者〉は存在論におさまるものではない) とその主張方法 (〈他者〉が存在することを前提にした記述方法) との間に矛盾が認められたのである。この批判を受け、レヴィナス〈他者〉論は、自己矛盾の問題を克服するために、「後期」の著作で言語に関する諸概念を新たに提起し、体系性を欠いた記述や、「存在する」という動詞に頼らない表現を多く用いるようになった、と理解されてきた。レヴィナス〈他者〉論は、デリダからの批判を受け、「転回」した、と。

——第2章 レヴィナス言語論の自己言及的特性：レヴィナス〈他者〉論解釈論争概観——

レヴィナス〈他者〉論は、確かにデリダの批判を受けた後、言語に関する諸概念や語法（本研究では言語論と称する）を一新させたようである。デリダによる批判後のレヴィナス言語論は、「レヴィナスが言語について言及した内容」だけにとどまらず、「その内容に規定されたレヴィナス自身の論述方法」をも含んだ自己言及的な性質を明らかに備えるようになる。それは、デリダによって批判された主張内容と主張方法との間の矛盾を乗り越えるために採用されたレヴィナスの工夫だと言える。例えば、レヴィナスは「後期」の著作にて、「語ること」、「語られたこと」、「前言撤回」という概念を多用する。これら概念は、存在論では捉えきれない〈他者〉について「語ること」が、語られるやいなや、文字や音声など指示対象を有する「語られたこと」として機能することになるため、その「語られたこと」を「前言撤回」しながらも「語ること」を続けることによって、〈他者〉の有り様を論じながら示す、という役割を果たす（AE：75）。すなわち、デリダによって批判された矛盾に対して自覚的になった上で、矛盾してしまった内容（「語られたこと」）を撤回しつつ（「前言撤回」）、語り直す（「語ること」）方法としてこれら概念が採用されたと言える（合田 1988：278）。

デリダの批判を受けた後、レヴィナス〈他者〉論が「転回」したという解釈は、教育学におけるレヴィナス受容にも大きな影響を与えた。その影響は、主に、レヴィナスの論じる自己-〈他者〉関係が、教育的関係へと援用可能であるかどうかをめぐる解釈論争に及ぶこととなった。その論争では、彼の〈他者〉論から「子どもの他者性を大切にせよ」や「教師は、絶えず子どもに呼びかけられており、その呼びかけに応答する責任を有する」などの教育をめぐる理念を読み取ることができるかどうか問われている。このような論争が生まれた背景には、援用否定派が、「転回」後、つまり「後期」のレヴィナス言語論の「目論見」に忠実であろうとしている、という事態がある。「後期」のレヴィナス言語論は、第1章の箇所先述したデリダによるレヴィナス批判の影響を最も強く受けた、とされてきた。そして、援用否定派のビースタは、デリダによるレヴィナス批判と、その後のレヴィナスの「転回」とを踏まえながら、「私たちはレヴィナスの著作において語られたことを超えている語ることに応答する必要がある」と論じている（Biesta 2001：76）。

しかしながら、デリダによる批判の後、「転回」を余儀なくされたと考えられてきたレヴィナス〈他者〉論に対する認識は近年改められてきている（ヴィーマー 2014；小手川 2015）。すなわち、「転回」というよりもむしろ彼の〈他者〉論は「深化」したと指摘されてきているのである。レヴィナス〈他者〉論の「転回」解釈においては、言語論の自己言及的特性は「後期」から意識されるようになったと理解されていたが、「深化」解釈においては、その自己言及的特性の萌芽は、既に「前期」の著作から見られるものと理解される。デリダとの影響関係から離れてレヴィナス言語論の自己言及的特性を詳細に検討していくことで、強硬な援用否定派の見解には収まらないレヴィナス〈他者〉論のプログラム——レヴィナスによって目論まれた〈他者〉論の展開計画——が見えてくる。その特徴は次の3点にまとめられる。①多様な意味に解釈されうるものとして構想されていること、②その思想内容を具体的状況に置き入れることで概念を正しく理解しようと試みられていること、③絶えず語り直し続けられるべきものとして編成されていること、の3点である。結論部では、この3つの特徴を踏まえ、レヴィナス〈他者〉論が、教育的関係をはじめとした具体的な状況へと援用されるよう元々想定されており、また、その援用をめぐる批判が生まれ、さらにそれに応答するという仕方で、議論が深められることを肯定的な事態として描いていることを示した。

——第3章 他者論の筋立てとしての叙事詩的な語りの問題：変容の契機として他者を位置付けることへの批判的考察——

第2章で提示したようなレヴィナス〈他者〉論を教育的関係へと積極的に援用した研究者にジョルダスマがいる。ジョルダスマは、レヴィナスの主体性概念を援用することによって、生徒に対する教師の倫理的関係の在り様を論じている (Joldersma 2014: 48f)。レヴィナスの主体性概念は、「自ら考え、判断し、行動する」という主体性の一般的な性格とは根本的に異なる。そうではなく、むしろ〈他者〉に対して曝されている受動的な性格を起点とした主体性概念をレヴィナスは構想している。ジョルダスマは、レヴィナスの主体性概念に基づいて、教師の生徒との関係の倫理的方向性を次のようにまとめる。①「記憶不可能な時間」から謎めいた性質を有する呼びかけが生徒から教師へと到来する。②その呼びかけは、教師の自由の埒外から到来するので教師は受動的であらざるをえない。③この受動的な教師の様態から、教師の(より深い)主体性は生起する。④その主体性を起点として、教師は責任を果たすために呼びかけへの応答を試みるが、その呼びかけの謎めいた性質ゆえに、その応答の妥当性が絶えず揺るがされる。⑤その揺るぎに耐えつつ、応答を試みる教師は、絶えずその応答の更新の要求に応じることになる。⑥ためらいながら応答する教師は、ためらう中で他者としての生徒の呼びかけの内容を聴き取ろうと努める。このような①～⑥のような直線的な時系列で構成される筋立てでもって、教師の生徒との倫理的方向性をジョルダスマは示している。

ジョルダスマは、叙事詩的な語り方——直線的な時系列で構成された、矛盾や葛藤を乗り越えて主人公が成長していく教養小説のような語り (矢野 2012: 344) ——でもって、レヴィナス主体性概念を教育的関係へと援用しているものの、レヴィナスは、自身の論述が叙事詩的な語り方にならないように絶えず警戒している (AE: 28)。というのは、レヴィナスは、この叙事詩的な語り方のうちに、西洋哲学の特徴を見出し、それを批判しているのである。その特徴というのは、他者との出会いを直線的な時系列のもとに位置付け、その出会いを経ることによって、主体がその出会いの経験を吸収し、同化する、という西洋哲学に通底する特徴である (EDE: 188)。このような特徴を有する西洋哲学においては、他者からの命令を引き受けることができ、また、その命令の内容を理解できる主体が暗に想定されている。レヴィナスは、そのような主体像から離れるために、〈他者〉に対して曝されている受動的な性格を起点とした主体性概念を提起していたのである。すなわち、レヴィナスが論じようとしているのは、まず呼びかけがあり、その後、その呼びかけに応答する、という構図ではなく、〈他者〉へと応答せざるをえないという事実から事後的に、応答以前の呼びかけがあったのかもしれない、という仕方で確証される〈他者〉の経験——「他律的経験」(ibid.: 190)——を論じようとしているのである。この他律的経験の位相を示すことによって、レヴィナスは、他者との出会いの経験を、倫理的主体化の契機として位置付けることへの疑念を呈している。叙事詩的な語り方へのレヴィナスの批判は、生徒の学びを説明するフレームとして、また、教師の働きかけの向上を説明するフレームとして近年教育学において受け入れられてきている「他者との出会いを通して自己同一性が問い直される」という筋立てに内在する問題を剔出しているのである。

——第4章 レヴィナス隠喩論にみる意味の伝達：叙事詩的な語りを超えて——

レヴィナスは、叙事詩的な語り方で〈他者〉について論じることを「言語の誤用」とであると断じ (AE: 243)、叙事詩的な語り方とは異なる論述方法を模索している。その論述方法の工夫の一つが、レヴィナスの隠喩論である。レヴィナスの隠喩論は、隠喩それ自体について論じるとともに、レヴィナス自身が論述

のなかで用いる隠喩の役割についても説明している。そこで、レヴィナスは、一般的な隠喩理解（相対的隠喩）——類似物による類似物の喚起——から離れ、隠喩のうちに、文脈の外部にある事柄へ言及する可能性を見て取る（絶対的隠喩）。というのも、レヴィナスにおいて、隠喩は、ある類似物による類似物の喚起という、特定の文脈内での指示機能を有するだけでなく、「思考者の収容能力を超えた意味の把握を可能にする移転」という機能を有している、とされるのである（CEII：341）。ここで、レヴィナスが隠喩の機能として強調しているのは、特定の文化内で通用する意味の移転としての文化的な意味作用ではなく、それまでの意識のあり方それ自体を問い直す倫理的な意味作用である（ibid.：344）。

この隠喩の機能を、レヴィナスは意識の問い直しという表現で説明する。この意識の問い直しという表現でレヴィナスが指し示そうとしているのは、問い直しに対して、もはや自分自身で意識的に反省することのできないまま〈他者〉に対して応答を迫られる、という関係の創設のされ方である。レヴィナスは〈他者〉への応答を可能にするのが、問い直しの意識ではなく、意識の問い直しであるということを強調する。問い直された者から問い直してきた者への応答というこの運動が、関係を創設する最初の働きかけだとされるのである。関根が論じているように、この意味作用のあり方は、「それ〔有形既定の人為的生成物〕を生み出すべく働く対人的な否応なき受動的な動性が始動する場」（〔 〕内引用者）と表現できる（関根 2013：48）。この見えにくい意味作用があってはじめて、文化的な意味作用が成り立つのである。そして、レヴィナスは、この〈他者〉との関係の意味作用という見えにくい意味作用のうちに、思考者の収容能力を超えた意味の移転の可能性を見ている。それは、思考者が対話者に伝えようと思っていた内容 A が、思いがけず対話者に内容 B として伝わってしまう、ということではない。そうではなく、レヴィナスは、対話者に向かって口を開き、言葉を紡ぎだそうとしてしまう、という出来事のうちに、記憶として想起しえない何かが思考者を触発していた可能性を見てとるのである。すなわち、記憶としては想起しえないという意味で、思考者の収容能力を超えているのである。そして、あったはずの出来事は対話者の現前ということであるが、その対話者の現前が、もはや記憶に昇らない仕方で思考者を触発してしまっている、ということに関して、意味の移転なのである。対話者としての〈他者〉の現前という出来事が、思考者を語り出させてしまう、というように。レヴィナスは、この隠喩論に基づきながら、その著作のうちに隠喩を配列する中で、読者の意識の問い直しを目論んでいるのである。

——第5章 レヴィナス〈他者〉論の方法としての誇張法——

レヴィナスは、隠喩論を1962年以降、ほとんど語らなくなるものの、その隠喩論の内容を発展的に継承したと考えられる〈他者〉論の方法としての誇張法について語り、実践するようになる。レヴィナスは、誇張法を説明するにあたって、その方法を超越論的方法と対比する。その対比されている超越論的方法を、レヴィナスは、つねに基礎を探究することを本義とするもの、と定義する（DI：141）。そしてレヴィナスは、自身の方法について「私はそれ〔超越論的方法〕とは違う仕方をとります。……ある観念からその最上級へ、その誇張法にいたるまで進む、という仕方です」（〔 〕内引用者）と論じている（ibid.）。

レヴィナスは誇張法の一例として受動性に関する論述を挙げている。レヴィナスは受動性という観念を、「いかなる受動性をも超えて、自分の許容範囲を超えるほどの受動性をもって受苦すること」と描き直している（ibid.：142）。受動性は、レヴィナスによれば、受け身ではあるものの、その受動性でもって、感覚を自ら統握することができるという能作の要素を含み込んだものだとされる。レヴィナスは、この能作の要素を排した受動性を論じようとしている。すなわち、自らの感覚を統握できるという受動性

に含まれた僅かばかりの能作をも排し、もはや自分自身で統御できない力で迫られ、その結果、受苦することになることとして受動性を描いているのである。この誇張法を用いた記述の試みのなかで、レヴィナスが行っているのは、ある観念でもって、別の観念を根拠づけるのではなく、ある観念を極限まで高めることで、異なる水準を論じ示すことにある。

レヴィナスの誇張法は、確かに、その記述が文字通りの意味で解釈され、その記述が現実化される時、迫害や錯乱という病的な形態を示す。その意味で、レヴィナスの誇張法は、規範的な機能を有しているとはいえない。そうではなく、過剰な性質を語ることを通して、読者の既存の解釈枠組みを反省させ、さらに読者がこれまで感知することのできなかった方向性をレヴィナスは論じ示している、と考えられるのである。このような意味でレヴィナス的な誇張法は、「批判的反省的機能」を有しているのである（Hayat 2007 : 490）。

——終章 レヴィナス〈他者〉論の教育学的意義——

レヴィナス〈他者〉論は、他者とはどのようなものであるか、という内容面の問いと、他者を論じるためにふさわしい方法とは何か、という方法面の問いとの両面を模索したが、教育学において積極的に論じられてきたのはその内容面の方であった。しかし、レヴィナス〈他者〉論をめぐる解釈論争が教育学において生起し、さらにその論争が時に排斥的な主張にさえ至る時、レヴィナス〈他者〉論の方法へと言及することは、教育学とレヴィナス〈他者〉論との豊かな関係可能性を改めて提示してくれる。その豊かな関係可能性は、第2章の箇所でも提示したように、具体的な教育的関係への援用を積極的に肯定してくれるものとしてレヴィナス〈他者〉論のプログラムが保証していた。

とはいえ、レヴィナス〈他者〉論に施された様々な言語上の工夫に着目した本研究は、教育学とレヴィナス〈他者〉論との関係可能性の提示という先行研究の整理に役立つのを超えて、教育学における他者論の自己矛盾の事態に対して示唆を与えていよう。レヴィナス〈他者〉論において一貫しているのは、〈他者〉の把握不可能性というステータスを維持しながら、〈他者〉について論じ示すという、一步踏み外せば、自らが批判しているものへと墮してしまうような試みである。実際に、レヴィナス〈他者〉論は、教育学における他者論において見いだされるような自己矛盾の事態を完全に回避しているとは言い難い。しかしながら、レヴィナス〈他者〉論は、前言撤回という自己言及的な概念の導入（第2章）をすることによって、及び、叙事詩的な語りを避けることによって（第3章）、隠喩論をベースにした誇張法を実践することによって（第4章、第5章）、〈他者〉論の意味内容を論じると同時に、〈他者〉の意味・方向を絶えず示し続けている点で、教育学における他者論の方法面に対する示唆を与える哲学者だと言える。

レヴィナス〈他者〉論のプログラムという観点から見た時、教育学における他者論の自己矛盾の事態を、肯定的に捉え直すこともできよう。すなわち、たとえ教育学における他者論が自己矛盾していたとしても、それに対する批判とその反批判とが繰り返される中で、これまで視野に入れられることのなかった他者が光を当てられ理解可能になると同時に、光のもとで照らし出されることで理解可能なものへと他者が縮減されてしまうものでもあるということが、論じ示されているのである。さらに、たとえ教育学における他者論の論述内容が自己矛盾しているとしても、その論述が読者にもたらす反省的効果は大きく、実際に、他者の方向性を意識した研究が多く積み上げられ、他者論をめぐる議論は豊かになってきた。レヴィナス〈他者〉論は、語られた字義通りの意味内容だけでなく、他者論のパフォーマンスとしての意味をも含み込んだ他者論の〈意味〉を教育学へともたらしているのである。

教育学における他者論は、教える者が自身の認識枠組みをよく反省することができ、他者としての子供に対して寛容になり、倫理的に教育を行う可能性を描いてきた。確かにその他者論の成果は、一方で、教える者のエゴイズムの克服には大きく寄与するものの、他方で、主体の反省性を強めることによって、結果的に、主体の中心性をより高めるナルシズムの可能性をも生んでいる（齋藤直子 2002：30）。このようなエゴイズムの克服がナルシズムの生起へと帰着する可能性を踏まえた時、レヴィナスの論じる言葉を借りれば、私たちは警戒の中で絶えず目覚め直す（DI：69）という仕方で、〈他者〉への方向性を確認し続けなければならない。レヴィナス〈他者〉論は、語られた字義通りのコンスタティブな意味に加え、〈他者〉への方向性に気付かせ、また、読者を目覚め直させ、警戒させるというパフォーマティブな意味の重要性を、そしてそのパフォーマンスの実践のあり方を、教育学へと提示しているのである。

主要引用・参考文献

- AE : *Autrement qu'être ou au-delà de l'essence*, Fata Morgana, Le Livre de poche, Paris, 2004a. (Orig. pub. 1974.), (合田正人訳『存在の彼方へ』講談社学術文庫、1999.)
- DI : *De Dieu qui vient à l'idée*, 2e éd, Vrin, Paris, 2004b. (Orig. pub. 1982.), (内田樹訳『観念に到来する神について』国分社、1997.)
- EDE : *En Découvrant L'existence avec Husserl et Heidegger* (réimpression conforme à la première édition suivie d'Essais nouveaux). J. Vrin, Paris, 1967., (佐藤真理人他訳『実存の発見：フッサールとハイデッガーと共に』法政大学出版局、1996.)
- EI : *Éthique et infini*, Fata Morgana, Le Livre de poche, Paris, 2012. (Orig. pub.1984), (西山雄二訳『倫理と無限：フィリップ・ネモとの対話』ちくま学芸文庫、2010.)
- EN : *Entre Nous*. Grasset, Paris, 1991., (合田正人他訳『われわれのあいだで：『他者に向けて思考すること』をめぐる試論』法政大学出版局、1993.)
- HA : *Humanisme de l'autre homme*, Fata Morgana, Le livre de poche, Paris, 2014. (Orig. pub. 1987), (小林康夫訳『他者のユマニズム』書肆風の薔薇、1990.)
- CE1 : *LEVINAS ŒUVRES1 : Carnets de Captivité et autres inédits*, Volume publié sous la responsabilité de Rodolphe Calin et de Catherine Chalier, Grasset, Paris, 2009. (ロドルフ・カラン他編、三浦直希他訳『レヴィナス著作集 1』法政大学出版局、2014)
- CE2 : *LEVINAS ŒUVRES2 : Paroles et Silence et autres conférences inédits au Collège philosophique*, Volume publié sous la responsabilité de Rodolphe Calin et de Catherine Chalier, Grasset, Paris, 2009. (ロドルフ・カラン他編、藤岡俊博他訳『レヴィナス著作集 2』法政大学出版局、2016)
- CE3 : *LEVINAS ŒUVRES3: Eros, Littérature et Philosophie Essais romanesques et poétiques, notes philosophiques sur le thème d'éros*, Volume publié sous la responsabilité de Jean-Luc Nancy et de Danielle COHEN-LEVINAS, Grasset, Paris, 2013. (ジャン＝リュック・ナンシー他編、渡名喜他訳『レヴィナス著作集 3』法政大学出版局、2018)
- QLT : *Quatre lectures talmudiques*, Minit, Paris, 1996., (内田樹訳『タルムード四講話』国文社、1987.)
- SMB : *Sur Maurice Blanchot*, Fata Morgana, Paris, 1975.
- TI : *Totalité et infini, essai sur l'extériorité*, Fata Morgana, Le Livre de poche, Paris, 1990. (Orig. pub. 1961.), (合田正人訳『全体性と無限：外部性についての試論』国分社、1989.)

欧文文献

- Andreotti, Vanessa “An Ethical Engagement with the Other: Spivak’s Ideas on Education” *Critical Literacy: Theories and Practices*, 1(1), 69-79, 2007.
- Biesta, Gert. “Levinas and Moral Education” In *Philosophy of Education 2000*, ed. Lynda Stone, 75-77. Urbana, Ill.: Philosophy of Education Society, 2001.
- . “Learning from Levinas: A Resoponse” *Studies in Philosophy and Education*, 22, 61-68, Kluwer Academic Publishers, 2003.
- . “Pedagogy with Empty Hands: Levinas, Education, and the Question of Being Human” In *Levinas and Education: At the Intersection of Faith and Reason*, ed. Denise Egéa-Kuehne, 198-210, New York, NY.: Routledge, 2008.

- . “The Rediscovery of Teaching: On robot vacuum cleaners, non-egological education and the limits of the hermeneutical world view”, in *Levinas and the Philosophy of Education*, ed. Guoping Zhao, 52-70, Routledge, 2018.
- Blanchot, Maurice. *L’Entretien infini*, Gallimard, Paris, 1969.
- . “Discours sur la patience (en marge des livres d’Emmanuel Lévinas)”, *Le Nouveau commerce*, cahier 30-31, printemps, 19-44, 1975.
- . *L’écriture du désastre*, Gallimard, Paris, 1980.
- Butler, Judith. *Prekarious life : the powers of mourning and violence*, Verso, NY, 2004. (本橋哲也訳『生のあやうさ：哀悼と暴力の政治学』以文社、2007.)
- . *Giving an account of oneself*, Fordham University Press, NY, 2005.(佐藤嘉幸他訳『自分自身を説明すること：倫理的暴力の批判』月曜社、2008.)
- . *Parting ways: Jewishness and the critique of zionism*, Columbia university press, NY, 2013.
- Calin, Rodolphe. *Lévinas et l’exception du soi*, PUF, Paris, 2005.
- Chalier, Catherine. & Bouganim, Ami. “Emmanuel Levinas: School Master and Pedagogue” In *Levinas and Education: At the Intersection of Faith and Reason*, ed. Denise Egéa-Kuehne, 13-25, New York, NY.: Routledge, 2008.
- Chinnery, Ann. “Levinas and Ethical Agency: Toward a Reconsideration of Moral Education.” In *Philosophy of Education 2000*, ed. Lynda Stone, 67-74. Urbana, Ill.: Philosophy of Education Society, 2001.
- . “Encountering the Philosopher as Teacher: the Pedagogical Postures of Emmanuel Levinas” *Teaching and Teacher Education*, 1704-1709, Elsevier, 2010.
- Garrison, Jim. “Ethical Obligation in Caring for the Other: Reflections on Levinas.” In *Levinas and Education: At the Intersection of Faith and Reason*, ed. Denise Egéa-Kuehne, 272-285, New York, NY.: Routledge, 2008.
- Derrida, Jacques. “Violence et métaphysique: essai sur la pensée d’Emmanuel Levinas” dans: *L’écriture et la différence*, 117-228, Éditions Points, Paris, 1998. (Orig. pub. 1967), (若桑他訳『エクリチュールと差異(上)』法政大学出版局、1977.)
- . “En ce moment même dans cet ouvrage me voici ” dans: *Psyché: Invention de l’autre TomeI*, Galilée, Paris, 159-202, 1998.
- . *Adieu à Emmanuel Lévinas*, Galilée, Paris, 2004. (藤本一勇訳『アデュー：エマニュエル・レヴィナスへ』岩波書店、2004.)
- Egéa-Kuehne, Denise. “Response to Claire Katz’s Review of *Levinas and Education: At the Intersection of Faith and Reason*: Levinas’s Life and Work at the Intersection of Faith and Reason” *Studies in Philosophy and Education*, 28, 383-386, Springer, 2009.
- Franck, Didier. *Dramatique des phénomènes*, PUF, Paris, 2001.(本郷均他訳『現象学を超えて』萌書房、2003.)
- Hayat, Pierre. “La subjectivité à l’épreuve de l’hyperbole” *Revue des Sciences Philosophiques et Théologiques*, 91, 483-494, 2007.
- Joldersma, Clarence. “Pedagogy of the Other: A Levinasian Approach to the Teacher-Student Relationship” In *Philosophy of Education 2001*, ed. Suzanne Rice, 181-188, Urbana, Ill.: Philosophy of Education Society, 2002.
- . “The Importance of Enjoyment and Inspiration for Learning from a Teacher” In *Levinas and Education: At the*

- Intersection of Faith and Reason*, ed. Denise Egéa-Kuehne, 43-55, New York, NY.: Routledge, 2008.
- . *A Levinasian Ethics for Education's Commonplaces: Between Calling and Inspiration*, London, Palgrave Macmillan, 2014.
- Katz, Claire. "Review of Denise Egéa-Kuehne, *Levinas and Education: at the intersection of faith and reason*" *Studies in Philosophy and Education*, 28, 375-381, Springer, 2009.
- Morgan, Michael L. *Discovering Levinas*, Cambridge University Press, New York, 2009(Orig. Pub. 2007).
- Nordtug, Birgit. "The welcoming of Levinas in the philosophy of education: at the cost of the Other" *Theory and Research in Education*, SAGE, 250-268, 2013.
- Ricœur, Paul. *Soi-Même Comme un Autre*, Éditions du Seuil, Paris, 1990.(久米博訳『他者のような自己自身』法政大学出版局、1996.)
- . *Autrement: Lecture d'autrement qu'être ou au-delà de l'essence d'Emmanuel Levinas*, PUF, Paris, 1997.(関根小織訳『別様に：エマニュエル・レヴィナスの『存在するとは別様に、または存在の彼方へ』を読む』現代思潮新社、2014.)
- Sebbah, David. *L'Épreuve de la limite: Derrida, Henry et Lévinas et la Phénoménologie*, PUF, Paris, 2001.(合田正人訳『限界の試練：デリダ、アンリ、レヴィナスと現象学』法政大学出版局、2013.)
- Standish, Paul. "Learning from Levinas: The Provocation of Sharon Todd." In *Philosophy of Education 2001*, ed. Suzanne Rice, 75-77. Urbana, Ill.: Philosophy of Education Society, 2002.
- . "Levinas and the Language of the Curriculum." In *Levinas and Education: At the Intersection of Faith and Reason*, ed. Denise Egéa-Kuehne, 56-66, New York, NY.: Routledge, 2008.
- Stengel, Barbara. "Review of Clarence Joldersma *A Levinasian Ethics for Education's Commonplaces: Between Calling and Inspiration*" *Studies in Philosophy and Education*, volume 35, issue 1, 119-122, 2015.
- Todd, Sharon. "On Not Knowing the Other, or Learning from Levinas." In *Philosophy of Education 2001*, ed. Suzanne Rice, 67-74. Urbana, Ill.: Philosophy of Education Society, 2002.
- . "Introduction: Levinas and Education: The Question of Implication." *Studies In Philosophy of Education*, 22, 1-4. Kluwer Academic Publishers, 2003a.
- . *Learning from the Other: Levinas, Psychoanalysis, and Ethical Possibilities in Education*, State University of New York Press, 2003b.
- . "Welcoming and Difficult Learning: Reading Levinas with Education" in *Levinas and Education: At the Intersection of Faith and Reason*, ed. Denise Egéa-Kuehne, 170-185, New York, NY.: Routledge, 2008.
- . "Experiencing Change, Encountering the Unknown: An Education in 'Negative Capability' in Light of Buddhism and Levinas" *Journal of Philosophy of Education*, volume 49, No.2, 240-254, 2015.
- Zhao, Guoping. "Levinas and the Mission of Education" *Educational Theory*, vol.62, no. 6, 659-675, 2013.
- . "Introduction: Levinas and the Philosophy of Education" *Educational Philosophy and Theory*, 48(4), 323-330, Routledge, 2016.

邦文文献

- イーグルストン、ロバート著、田尻芳樹他訳『ホロコーストとポストモダン：歴史・文化・哲学はどう応答したか』みすず書房、2013.

- 井谷信彦「受苦的な経験における生の可能性：O.F.ボルノウ『非連続的な生の形式』再考」『京都大学大学院教育学研究科紀要』53、32-44、2007.
- 「コロキウムの趣旨」([教育思想史学会第21回大会]コロキウム 主体性の超克は現か夢か：「不眠症」の時代の教育思想)『近代教育フォーラム』19、173-175、2010.
- 「タクトの啓発と『ありうること』への開放：ヴァン＝マーネンの省察理論と意味生成の沃野」『教育学研究論集』武庫川女子大学、8、1-8、2013.
- 伊原木大祐『レヴィナス 犠牲の身体』創文社、2010.
- ヴィーマー、トマス著、藤岡俊博訳「複数の序文 言語の意味性について：『全体性と無限』から出発して」合田正人編『顔とその彼方：レヴィナス『全体性と無限』のプリズム』知泉書房、33-56、2014.
- 上田和彦『レヴィナスとブランショ：〈他者〉を揺るがす中性的なもの』水声社、2005.
- 内田樹『ためらいの倫理学：戦争・性・物語』角川文庫、2003.
- 『レヴィナスと愛の現象学』文春文庫、2011.
- 小野文生「教育哲学における他者解釈の技法の機制について：レヴィナスとブーバーの比較を通して」『教育哲学研究』85、59-75、2003.
- 「教育と宗教・超越の〈紐帯〉を思考することについて：『教育哲学研究』の半世紀を読み直す」『教育哲学研究』100号記念特別号、243-262、2009.
- 奥野佐矢子「言語のパフォーマティヴィティによる主体構築に関する考察：ジュディス・バトラーの思想を手がかりとして」『教育哲学研究』93、85-101、2006.
- カーニー、リチャード、レヴィナス、エマニュエル著、庭田茂吉訳「無限なものの倫理学：エマニュエル・レヴィナスとの対話」リチャード・カーニー編『現象学デオルマシオン』現代企画室、86-128、1988.
- カラン、ロドルフ+シャリエ、カトリーヌ著、三浦直希訳「序」ロドルフ・カラン他監修、三浦直希他訳『レヴィナス著作集1』法政大学出版局、19-45、2014.
- カラン、ロドルフ著、藤岡俊博訳「はしがき」カラン、ロドルフ+シャリエ、カトリーヌ監修、藤岡俊博他訳『レヴィナス著作集2』法政大学出版局、5-8、2016a.
- カラン、ロドルフ著、藤岡俊博訳「序 I」ロドルフ・カラン他監修、藤岡俊博他訳『レヴィナス著作集2』法政大学出版局、9-40、2016b.
- 川久保学「第6章 臨床空間としての学校：教育困難校と歓待の倫理」高橋勝編『子ども・若者の自己形成空間：教育人間学の視線から』東信堂、230-276、2011.
- 熊野純彦『レヴィナス：移ろいゆくものへの視線』岩波人文書セレクション、2012.
- 久米博『隠喩論：思索と試作のあいだ』思潮社、1992.
- 下司晶『教育思想のポストモダン：戦後教育学を超えて』勁草書房、2016.
- 合田正人『レヴィナスの思想：希望の揺籃』弘文堂、1988.
- 「果てなきパリーノディア：レヴィナスにおける言語の陰謀1」『季刊 iichiko』13、62-96、1989.
- 「果てなきパリーノディア：レヴィナスにおける言語の陰謀2」『季刊 iichiko』14、57-96、1990.
- 『レヴィナスを読む：〈異常な日常〉の思想』ちくま学芸文庫、2011.
- 郷原佳以「「全体へのパッション」あるいは名前の射程：『彼方への一步』に至るブランショ」『関東学院大学文学部 紀要』119、1-31、2010.
- 小玉重夫「物語論を公共性を開くために：主体の脱中心化へ向けて」『近代教育フォーラム』19、31-36、

2010a.

- 「教育思想史におけるポストコロニアルの視点」『近代教育フォーラム・別冊 教育思想史コメント』、153-161、2010b.
- 『教育政治学を拓く：18歳選挙権の時代を見すえて』勁草書房、2016.
- 小手川正二郎『甦るレヴィナス：『全体性と無限』読解』水声社、2015.
- 小林康夫「断片の思考—ブランショの《*désastre*》をめぐって」『現代詩手帖』27(12)、132-137、1984.
- 「不可能なものへの権利」『ユリイカ』17(4)、149-161、1985.
- 齋藤昭「教育と他者：教育的存在論の構造(其の四)」『三大学教育学部研究紀要』、教育科学 41、149-171、1990.
- 『教育的存在論の探究：教育哲学叙説』世界思想社、1999.
- 齋藤直子「教育の希望」『近代教育フォーラム』11、27-35、2002.
- 「大人の教育としての哲学：デューイからカベルへ」『近代教育フォーラム』16、51-66、2007.
- 「去る教師・遺す教師：カベルによる『ウォールデン』解釈と「解釈の政治学」」矢野智司他編『変貌する教育学』世織書房、77-103、2009.
- 斎藤慶典『レヴィナス 無起源からの思考』講談社選書メチエ、2005.
- 佐藤義之『レヴィナスの倫理：「顔」と形而上学のはざままで』勁草書房、2000.
- ザハヴィ、ダン著、中村拓也訳『自己意識と他性：現象学的探究』法政大学出版局、2017.
- サリー、サラ著、竹村和子訳『ジュディス・バトラー』青土社、2005.
- ジャンニコ、ドミニク著、北村晋他訳『現代フランス現象学：その神学的転回』文化書房博文社、1994.
- 菅野盾樹『新修辞学：反〈哲学的〉考察』世織書房、2003.
- スタンディッシュ、ポール著、齋藤直子訳『自己を超えて：ウイトゲンシュタイン、ハイデガー、レヴィナスと言語の限界』法政大学出版局、2012.
- スタンディッシュ、ポール+齋藤直子「平等に先立つ倫理：レヴィナス的道德教育の再構築に向けて」『現代思想』30(4)、244-260、2002.
- 皇紀夫「第4章 『人間と教育』の語り直し」皇紀夫編『「人間と教育」を語り直す：教育研究へのいざない』ミネルヴァ書房、93-138、2012.
- 関根小織『レヴィナスと現れないものの現象学：フッサール・ハイデガー・デリダと共に反して』晃洋書房、2007.
- 「形而上学批判の言語技法」『アルケー』18、43-59、2010.
- 「レヴィナスの草稿A群と講演『メタファー』における隠喩論」『宗教哲学研究』30、37-52、2013.
- 高橋哲哉『デリダ：脱構築』講談社、1998.
- 高橋舞『人間成長を阻害しないことに焦点化する教育学：いま必要な共生教育とは』ココ出版、2009.
- 高橋勝『経験のメタモルフォーゼ：〈自己変成〉の教育人間学』勁草書房、2007.
- 田中智志『他者の喪失から感受へ：近代の教育装置を超えて』勁草書房、2002.
- 『何が教育思想と呼ばれるのか：共存在と超越性』一藝社、2017.
- 谷口博史「言葉と暴力をめぐって(上)：ブランショ、デリダ、レヴィナス」『みすず』46(2)、26-56、2004a.
- 「言葉と暴力をめぐって(下)：ブランショ、デリダ、レヴィナス」『みすず』46(3)、40-54、2004b.
- 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(審議のまと

め)」、2012、

〈http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/sonota/_icsFiles/afieldfile/2012/05/15/1321079_1.pdf〉(最終アクセス 2019 年 1 月 22 日)

鶴間規文「教育関係の新展開」市村尚久・天野正治・増渕幸男編『教育関係の再構築：現代教育への構想力を求めて』東信堂、243-263、1996.

長坂真澄「レヴィナスの思想と懐疑論：哲学における真理基準遡行の足跡」『現代思想』40(3)青土社、190-207、2012.

ナンシー,ジャン=リュック著、渡名喜他訳「序 レヴィナスの文学的な〈筋立て〉」ナンシー,ジャン=リュック他監修、渡名喜他訳『レヴィナス著作集 3』法政大学出版局、7-31、2018.

野平慎二「教育哲学のパフォーマンスとセンテンス」『教育哲学研究』97、46-50、2008.

—「生成と物語：語りと語り直しの可能性の思想史」『近代教育フォーラム』19、15-30、2010.

橋本憲幸『教育と他者：非対称性の倫理』春風社、2018.

ビースタ、ガート著、藤井啓之・玉木博章訳『よい教育とはなにか：倫理・政治・民主主義』白澤社、2016. —、上野正道訳『教えることの再発見』東京大学出版会、2018.

平石晃樹「レヴィナスにおける苦しみをめぐる思考と人間形成への問い：『無益な痛み』を中心に」『教育哲学研究』101、137-155、2010a.

—「レヴィナスにおける主体・経験・知の問い直し」([教育思想史学会第 19 回大会] コロキウム主体性の超克は現か夢か「不眠症」の時代の教育思想)『近代教育フォーラム』19、178-183、2010b.

—「他律による自律：レヴィナスにおける〈教え〉の概念をめぐって」『教育哲学研究』104、114-132、2011.

—「倫理と教え：レヴィナスにおける〈問い〉とその〈無起源〉」『理想』694、109-119、2015.

—「思考と外部性：社会を見いだす教育哲学」『教育哲学研究』116、22-39、2017.

福若真人「『聞くこと』の他動性と『行うこと』の先行性：レヴィナス思想における非暴力的な『教え』の可能性と条件」『教育哲学研究』113、112-129、2016.

古屋恵太「第 9 章 省察の実践の矛盾を超えて：生成と他者の概念」山本睦他編『教師を支える研修読本：就学前教育から教員養成まで』ナカニシヤ出版、155-174、2014.

松下佳代「大学における『学びの転換』とは——unlearn 概念による検討」東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』東北大学出版会、5-15、2010.

マルカ、サロモン著、齋藤慶典、渡名喜庸哲、小手川正二郎訳『評伝レヴィナス：生と痕跡』慶応義塾大学出版会、2016.

丸山恭司「ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論とその教育学的意義：教育論としての言語ゲーム論における『理解』と『知識』」『教育哲学研究』111、41-54、1992.

—「第一二章 教育と他者性：ウィトゲンシュタインの子どもから」小笠原道雄監修『近代教育の再構築』福村出版、192-205、2000a.

—「教育において〈他者〉とは何か：ヘーゲルとウィトゲンシュタインの対比から」『教育学研究』67 (1)、111-119、2000b.

—「教育・他者・超越：語りえぬものを伝えることをめぐって」『教育哲学研究』84、38-53、2001.

—「教育という悲劇、教育における他者：教育のコロニアリズムを超えて」『近代教育フォーラム』11、

- 1-12、2002.
- 「教育現場の暴力性と学習者の他者性」越智貢編『岩波 応用倫理学講義 〈6〉 教育』岩波書店、116-131、2005.
 - 「言語の呪縛と解放：ウィトゲンシュタインの哲学教育」『教育哲学研究』96、115-131、2007.
 - 「第6章 道德教育の限界と可能性を考える：人間操作の技術の時代に」小笠原道雄・田代尚弘・堺正之編『道德教育の可能性：徳は教えられるか』福村出版、82-91、2012.
 - 「学校の暴力を考える：教育的まなざしを転換するために」『高校生活指導』196、100-107、2013.
 - 「第2章 道德教育に期待するということ：善意の罠に陥らないために」丸山恭司編『道德教育指導論』協同出版、23-38、2014.
 - 「第21章 教育哲学の実践：その状況性と再帰性」小笠原道雄編『教育哲学の課題「教育の知とは何か」：啓蒙・革新・実践』福村出版、366-381、2015.
 - 「教育哲学実践の状況性と再帰性」『教育哲学研究』113、144-145、2016.
- 水本徳明「学習観の転換と経営管理主義の行方：公教育経営における権力様式に関する言語行為論的検討」『教育学研究』84(4)、398-409、2017.
- 村井尚子「応答としてのケアの可能性と不可能性：教育責任についての試論」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』3、203-212、2013.
- 村上靖彦「方法としてのレヴィナス：情動性の現象学における自己の地平構造」『現象学年報』20、29-39、2004.
- 村松灯「政治的判断において『他者』とは誰か：H.アーレントにおける『複数性』概念の射程」『教育哲学研究』111、91-110.
- 森美智代『〈実践＝教育思想〉の構築：「話すこと・聞くこと」教育の現象学』溪水社、2011.
- 森岡次郎「第9章 教育における他者性」田井康雄・中戸義雄編『探究・教育言論：人間形成の解明と広がり』学術図書出版、149-160、2005.
- 「『新優生学』と教育の類縁性と背反：『他者への欲望』という視座」『教育哲学研究』93、102-121、2006.
 - 「障害者解放理論から『他者への欲望』へ」『近代教育フォーラム』18、45-62、2009.
- 矢野智司「教育の語り方をめぐる省察」香川大学教育学研究室編『教育という「物語」』世織書房、1999.
- 『自己変容という物語：生成・贈与・教育』金子書房、2000.
 - 『意味が躍動する生とは何か：遊ぶ子どもの人間学』世織書房、2006.
 - 『贈与と交換の教育学：漱石、賢治と純粋贈与のレッスン』東京大学出版会、2008.
- 「限界への教育学に向けて：不可能性と可能性とを横断する銀河鉄道」矢野智司・今井康雄・秋田喜代美・佐藤学・広田照幸編『変貌する教育学』世織書房、21-44、2009.
- 「崇高と生成」『近代教育フォーラム』19、37-44、2010.
- 「教育人間学が自己変容する『限界への教育学』という運動：語ることの不可能性と可能性」田中毎実編『教育人間学：臨床と超越』東京大学出版会、330-348、2012.
- 山口美和「『親』になるということ：E・レヴィナスの『顔』の概念を手がかりに」臨床教育人間学会編『他者に臨む知：臨床教育人間学・1』世織書房、219-238、2004.
- 「エマニュエル・レヴィナスの思想における『近さ』の意味」『教育哲学研究』111、111-129、2015.
- 吉永和加『〈他者〉の逆説：レヴィナスとデリダの狭き道』ナカニシヤ出版、2016.